

令和6年度 S特選コース

第2回 入学試験問題 (2月2日 午後)

国語 (50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

一 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、机<sup>レ</sup>上に筆記用具を置く。
- 2、うわさが流<sup>レ</sup>布する。
- 3、滋味<sup>レ</sup>に富む海の幸。
- 4、氏神<sup>レ</sup>に守られている村。
- 5、危<sup>レ</sup>うい場面に出くわす。
- 6、リュウイ点に目を通す。
- 7、ゲキテキな結末を迎える。
- 8、事業をカクチョウする。
- 9、キカク外の大きさだ。
- 10、ねらいを定めて弓をイ<sup>レ</sup>る。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学三年生の春野<sup>あつぎ</sup>暁は、昨年転校してきた平川中学で女子バスケットボール部を立ち上げ、初心者の<sup>きんこ</sup>欣子、リモ、薫<sup>かわる</sup>を含むメンバーで練習に打ち込んできた。春季大会では強豪校である南条中学に逆転勝利し、準優勝を果たす快挙を見た。ところがその試合の帰り道、薫は二週間後に南条中学に転校することを仲間<sup>なな</sup>に告げ、夏季大会に向けて闘志を燃やしていた暁たちはショックを受ける。しばらくして暁たちは夏季大会を迎えた。

いまから一か月半前、薫<sup>注</sup>は転校する前に一度だけ部活に顔を出した。一年生に挨拶<sup>あいさつ</sup>をするためだった。南条中学に転校することを伝えた後、薫は一年生に向かって「申し訳ない」と頭を下げ、暁たちにも何度目かの謝罪をした。

「せっかくだから練習していきなよ」

挨拶をすませて帰ろうとする薫を引き留め、暁はほとんど無理やり練習着に着替えさせた。他の部員とはきちんと握手をしてお別れをしたのに、亜利子とはまだ口をきいていないからだ。

「今日は練習の最後にシャトルランをしましょうか」

暁の意図に気づいてか、<sup>①</sup>練習終了間際に欣子がそう言い出し、

「いいねいいね。一年生は初めてでしょ、シャトル」

とリモがすぐさま乗ってきた。走る距離はコートのコートラインの端から端まで。笛が鳴ったらいつせいに走り出し、五秒以内にラインを越えていなかったら失格。途中で苦しくなった者はその時点で抜けてもいい。一年生にルールを説明した後、欣子が中林を職員室まで呼びに行った。笛を吹いてもらうためだった。

暁には欣子がなぜいま、シャトルランをしようと言い出したのかわかっていた。シャトルランの二強は、薫と亜利子の二人だったからだ。

「よし、じゃあ始めるぞ」

中林が銀色の笛を口にくわえ、ピツと鳴らす。

苦しかったらいつ抜けてもいい。無理をしたら怪我をするから、と一年生に忠告して十一人いつせいに走り始める。ひとり、またひとりとギブアップしていき、百本を超えて残ったのは欣子以外の三年生五人と、一年生では田所ひとりだった。

田所がまず脱落し、それから七美、リモと抜けていく。暁は百三十五本まで食らいついたけれど、もう心臓が破裂しそうなくらい痛くなったので、命の危険を感じてコートの外に倒れ出た。予想通り薫と亜利子の一騎打ちとなったところで、みんなでその勝負を見守った。

やがて中林がいいかげん笛を吹くのに疲れてきた頃、薫がついにサイドラインで足を止めた。シャトルラン、百六十三本。自身の記録を十本も上回ってのギブアップ。亜利子もすでに足がもつれていたが、勝ち越しの一本のために、渾身のターンをみせた。

「優勝は野本さん、百六十四本」

ホイッスルに唾でも溜まったのか変な笛音を響かせた後、中林が高らかに声を上げる。

「野本先輩、すごいです」

一年生から上がる賞賛の声に満面の笑みを浮かべ、亜利子がガッツポーズのまま寝そべった。反対側のサイドラインのそばで蹲っていた薫が、<sup>②</sup>( )で息をしながら悔しそうに笑っている。

「二人ともすごいな。どこまでいくのかと焦ったよ」

笛を吹いていただけの中林でさえ、その場にぐったり座りこんでいた。

先に立ち上がったのは、亜利子だった。ランの途中で足を痛めたのか、右足を庇いながら薫のところに戻ってまっすぐ歩いていく。

それを見た薫もゆっくりと立ち上がり、近づいてくる亜利子のことを、じっと見つめていた。亜利子の歩みはどんだんのろくなっていって、最後は右足を引きずって前へ進んでいく。時折痛そうに顔を歪めている。

「うちの勝ちだ」

亜利子が倒れ込むようにして薫に抱きついた。そうされることがわかっていたのか、薫が両腕を伸ばし、しっかりとその体重を受け止める。亜利子が顔を下に向け、「<sup>③</sup>うち、薫のこと一生許さないからっ」とくぐもった声で叫ぶ。

「ごめん」

亜利子の体を支えたまま、薫がもう何度言ったかしのれない「ごめん」をまた口にした。

「謝るんだったら、夏までこのチームにいろっ」

「……ごめん」

「パス出す場所がなくて困った時、いつもあんたを探したの。だって薫ってばほんといい場所に走ってるんだもん。絶対に走ってるんだもん。うちがどんなにあんたのこと信用してたか……」

顔を上げた亜利子が、思いきり口を歪めた。いつもの意地悪な顔を作ろうとして、でもそう巧くはいかず、亜利子の両方の目からぼたぼたと涙がこぼれ落ちてくる。

「<sup>④</sup>応援するから。あんたのこと応援してる……」

「ありがとう。……亜利子、足大丈夫？」

薫の目にも、うつすらと涙が滲む。

「皮めくれた。ほら、血が出てる。でもいいのさ、最後は薫に勝って終わったからねーだ」

亜利子が「ははん」と笑い、靴下を脱いで血まみれの足の裏を見せていた。薫は苦笑しながら、一年生に救急箱を取りに行ってくれないかと頼み、亜利子の足に絆創膏を貼ってやっていた。部活終了のチャイムが聞こえ、欣子の指示で一年生たちが片付けを始める。

欣子が「薫、わざと負けたんじゃない？ほんとはまだ走れたんじゃないの」と睨に耳打ちしてきた。睨は「<sup>⑤</sup>あれが薫という人だよ。亜利子が怪我してることに気づいたんだよ」と笑い返す。片付けが終わると、コートで陣を組んだ。一年生も輪の中に加わる。この顔ぶれで陣を組むのはこれでもう最後。信じられなかったけれど、実感もわかなかったけれど、本当にそれが最後になった。

隣のBコートの主審が試合終了の笛を吹くと同時に、南条中側のベンチから拍手が起る。でもそれはまだ余裕のある拍手。東京都大会の頂点、さらに全国を目指す南条中にとっては、まだ初戦の一勝だから。

100点ゲームで二回戦を突破し、三回戦へと を進めた南条中の選手たちができてきばきと片付けをすませベンチを空ける。黒色のユニフォームがあつという間に試合会場から退場していくのを、暁は横目で見ていた。

体育館を出る間際、薫が暁のほうを見た。吸い寄せられるように視線が合う。

頑張れ――。

薫の唇がそう動いたような気がした。暁は右手を挙げてその言葉に応える。気がつけば暁以外の四人も、自分と同じように薫が立つ体育館の入口を <sup>⑥</sup>見つめていた。

審判が「整列っ」と声を上げる。

「よし、いこうっ」

暁は大声を張り、サイドラインまで走っていく。ボールが床に弾む低い音。風のうねりにも似た大歓声。カメラのシャッター音。 <sup>⑦</sup>体育館の中にあるすべての音が、きちんと整理されて耳に入ってくる。

サイドラインに足の先を合わせて横一列に整列すると、視線を上げて平川中の応援席を眺めた。窓を覆う <sup>おほ</sup>暗幕の隙間 <sup>すきま</sup>から入る細長い光の中に、父の顔を見つける。そのすぐ近くに <sup>まじ</sup>サラさんと <sup>みどり</sup>翠が立っていた。

「薫、こっち見てたわね」

隣に並ぶ欣子が、暁にだけ聞こえる声で言った。

「目が合った」

「私たちの試合、観てくれているといいわね」

「大丈夫。きつと観てる」

「私たちもまずは一勝ね」

「うん、全力でいこう」

リモがジャンプボールに出ていき、暁たちもそれぞれのポジションに散っていく。

審判の手から離れたボールが、空中に高く浮かぶ。ボールに向かって反り上がるリモの骨ばった背中を見つめながら、暁はボールの行方に全神経を集中させた。

リモが床に向かって叩きつけたボールを七美が素早くキャッチし、亜利子に渡す。

「速攻っ」

亜利子が暁のほうを見ながら、作戦通り、高く長いパスを出してきた。ボールより先へ。全力でコートを走っていると、いつさいの音が聞こえなくなった。パスを受けるために、ただ全力で走る。それだけで胸が熱くなる。ボールが暁に向かって猛スピードで近づいてきた。だがこのままだとボールは暁の頭上を越えて、コート外まで抜けていってしまう。落下点はまだ少し先だ。

「跳べ、暁っ」

コートの中か外からか。<sup>⑧</sup>どこかで誰かがそう叫ぶのが聞こえた。暁は手を伸ばし、息を止め、思いきり床を蹴った。

(藤岡陽子「跳べ、暁！」より)

(注1)「薫」……………もとは陸上で全国大会レベルの活躍をするほどの選手。暁たちのチームにとって不可欠な存在に成長したが、南条

中学の顧問から誘いがあり、思案の末に転校の意志を固めた。

(注2)「亜利子」……………七美とともにバスケットボール経験者として入部した部員。

(注3)「サラさんと翠」……………リモと欣子それぞれの母親。

問一、——線①「練習終了間に欣子がそう言い出し」とありますが、欣子の発言の意図はどのようなことですか。それを説明した次の文の空

欄にあてはまる言葉をそれぞれ指定された字数で答えなさい。ただし、1は文章中の言葉を使って、2は考えて答えること。

1、二十五字以内

ことよって、

2、十字以上十五字以内

という意図。

問二、——線②が「苦しそうに荒い息をしながら」という意味になるように、( )にあてはまる身体の一部を表す漢字一字を答えなさい。

問三、——線③「うち、薫のこと一生許さないからっ」・④「応援するから。あんたのこと応援してる……」の亜利子の心理について五人の生徒が話し合いをしています。解釈に誤りがあるものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア、生徒A——③は亜利子が薫に示したいわば「最後の意地っ張り」のような発言だと思うな。決して悪意を持ってした発言ではないと思う。

イ、生徒B——そうかな。私は亜利子が薫に対して心底怒りを持ってたんだと思ったよ。薫の裏切りが許せなかったんじゃないかな。

ウ、生徒C——でも④の発言は、明らかに薫に示した亜利子の許しと激励の思いからのものでしょ。

エ、生徒D——私は、③は亜利子が自分の気持ちに区切りをつけるために、薫にきついことを言ったんだと思うよ。

オ、生徒E——④が悪化していた二人の関係性が元に戻った証であることは、二人の涙が物語っているよね。

問四、——線⑤「あれが薫という人だよ」とありますが、薫はどのような人物として描かれていますか。適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、「薫が両腕を伸ばし、しっかりとその体重を受け止める」という描写は、受け止めたのは亜利子の体重だけではなく、亜利子を持っているあらゆる思いということであり、包容力のある少女として描かれている。

イ、「薫がもう何度言ったかしのれない『ごめん』をまた口にした」という描写は、薫が自分の行為に心から反省しきれていないことが示されており、自分の気持ちを素直に人に伝えられない少女として描かれている。

ウ、「薫の目にも、うっすらと涙が滲む」という描写は、涙をこらえきれない亜利子と比べて、薫は心が動いてもそうした感情をできるだけ人に見せないようにする我慢強い少女として描かれている。

エ、「亜利子の足に絆創膏を貼ってやっていた」という描写は、単純に亜利子の足の傷の手当を示すのみならず、亜利子の「心の傷」の手当をも示しており、薫は不器用だが優しい少女として描かれている。

問 五、にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、事    イ、膝ひざ    ウ、駒こま    エ、歩

問 六、——線⑥「見つめていた」の主語を文章中から三字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問 七、——線⑦「体育館の中にあるすべての音が、きちんと整理されて耳に入ってくる」とありますが、これは何を表現していますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、暁をとりまく状況の全てが整然としており、ある種の無機質な世界となっているということ。  
イ、試合に臨むにあたり、暁は高揚感こうやうかんはあるものの、意外に冷静さを保っているということ。  
ウ、雑然とした暁の心理とは裏腹に、暁の上に流れる時間が淡々としたものであるということ。  
エ、試合に臨む暁の闘志に、会場全体が飲み込まれて、音までも一体化して聞こえたということ。

問 八、——線⑧「どこかで誰かがそう叫ぶのが聞こえた」とありますが、「誰か」とはどの人物と考えられますか。適当なものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア、父  
イ、薫  
ウ、審判  
エ、薫以外の南条中の選手  
オ、対戦相手の選手  
カ、暁のチームメイト



問九、この文章の表現について説明したものと最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、会話を多用することで、多感で主張の強い中学生同士のコミュニケーションの難しさを表現している。
- イ、解決しがたい問題を抱えた登場人物を多く描くことで、複雑に絡み合った人間関係を表現している。
- ウ、亜利子と薫の会話文では「……」を繰り返して、二人のわだかまりや心理的な距離感を表現している。
- エ、練習や試合の場面では短文をたたみかけるように重ね、競技の迫力やスピード感を表現している。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、省略した箇所があります。

① 科学者たちはいったい何のために研究をするんでしょう？

かつてヨーロッパの哲学者たちは、自然というものを「神の作品」であると考えていました。なぜかつて？ 『創世記』にそう説かれているからです。『創世記』というのは、ユダヤ教とキリスト教の聖典であり、当時のヨーロッパ人にとっては心の拠りどころに等しいものだったんです。

そこで彼らはこう考えた。——「この自然というものを、一頁一頁丹念に読んでいけば、聖書を読むのと同じくらいの確かさで、偉大なる神の計画が明らかになるだろう。すなわち、神が何をしようとしてこの世界を造り、そこに人間を造って、このように世界を動かしているのか、自分たちにもわかってくるにちがいない」。要するに、<sup>(注1)</sup> ニュートンも含め、かつての「哲学者」たちは、神の御業を自然のなかに確認したい、という熱望によって研究に勤<sup>いそ</sup>しんでいた。すくなくともヨーロッパの哲学というのは、あくまでキリスト教的な背景の中で成立していた知的営み、だったんですね。

A、一九世紀以降の「科学者」たちは、これらのバックグラウンドを切り捨てました。科学者であること、すなわち自然を研究するにあたって、キリスト教的背景を持つていなければならないという I は捨てたんです。だから、キリスト教徒以外の人たち、たとえばイスラム教徒であろうと、仏教徒、ヒンドゥー教徒であろうと、科学者であることに何の不自由もないはずだし、無神論者でももちろん同じ。宗教的背景とは無関係に、科学者たちは自分の仕事ができるようになっていく。

もはや II を追求することが「科学」の目的ではない。だとすれば、彼らを研究に駆り立てているものはいったい何なのか？——それは、「好奇心」という言葉でしか表現できない。つまり、「面白いから」。

この自然のなかに、こういう謎<sup>なぞ</sup>を見つけた。この謎を解いてみなければ、死んでも死にきれない——そういう思いを持って謎にチャレンジすることが、科学を研究することの目的になってきたわけです。

こういった人たちにとって、報われる、報われない、といったことは関係ないんですね。実際、「科学者」という人種が現れた一九世紀中頃は、まだノーベル賞も創設されていなかったし、「科学者」として雇ってくれる企業もなかった。

実は、初期の科学者たちはたいがい貴族だったんです。要するに、お金を稼<sup>かせ</sup>がなくても生活ができる人たち。しかも、研究にお金が必要な場合は、自分の懐<sup>ふところ</sup>から調達できる。研究するための場所も自分の館の中に設けることができる。そういう人たちが、「面白いからやろう」「わかりたいからやろう」。それが初期の「科学者」の姿だったんですね。

そのうちに科学者たちは、同じ類の好奇心を持つ者同士で集まるようになる。

B、<sup>(注2)</sup> 原子というもののしくみや、物質の構造に対して好奇心

をかき立てられる人たちは、その人たちだけで一つのコミュニティを形成する。いわば科学者共同体。それらが具体的な形となったものが学会なんです。物理学会、有機化学会、植物学会、動物学会など、みんなこれに当たります。すると、科学研究は、その科学者共同体の内部に限られてくるようになるんです。

どうということか？

**C**、研究によって新しい知識がつくられます。これを知識の生産という言葉で呼びましょう。次に、生産された知識は蓄積されていきます。いったいどこに？論文の中にです。論文という形で、論文誌・学術誌・ジャーナル(注4)のなかに蓄積される。そしてこれが仲間内の間だけで流通していく。論文誌というものは、基本的には学会が発行しているものが大部分です。学会費を払えば無料で配布されますが、外部の人々が手に取る機会ほとんどない。学会の会員の間だけで読み回されているにすぎない。

外の目に触れない一方で、学会員のなかには、そこで流通している知識を使ってさらに自分の研究を伸ばしたい、という人が出てくる。流通している知識を活用したり消費したりする行為もさかんに生まれてくる。それも当然ながら、同じ専門に属する仲間同士の間だけです。「これはいい仕事だ」「これは案外たいしたことない」、そういう評価も専門の仲間だけができるわけです。

② こうした現象は、いわゆる「ご褒美」(注5)についても同様に指摘できる。ノーベル賞が始まったのは一九〇一年ですが、実はその前からすでにご褒美的なものも存在していました。

あまり耳にしたことがないかもしれませんが、英語には“eponym”(注3)（エポニム）という不思議な言葉があるんです。これはどういう意味かというと、実例を挙げると非常にわかりやすい。たとえば、樺太(注6)とロシアの東海岸との間が陸続きになっているかという地形学の問題。これを、大変な努力と困難を積み重ねながら発見したのが間宮林蔵(注7)という人です。その功績を称え、私たちはこの海峡のことを「間宮海峡」と呼んでいる。これがまさしくエポニムなんです。科学の世界でいうと、ある科学的事実に関して、それを発見した人の名前をつけて呼ぶこと。

このエポニムの例、当然ながらたくさん挙げられます。理科の授業で出てくる法則や公式なんかもこれに相当します。たとえば、「ハイゼンベルクの不確定性関係」。皆さんが学ぶ物理の授業の中にはまだ出てこないかもしれないけれど、これは量子力学(注8)の中で非常に大事なものとして扱われている法則のことです。「マックスウェルの電磁方程式」なんかもそう。これは一九世紀の終わりにマックスウェルという人が発見してくれた電磁気学(注9)の基本方程式ですね。

こんなふうに、新しく発見してくれた人の名前を付けて呼ぶのは、科学者同士の尊敬と感謝の意が込められているからです。あなたのおかげでこういうことがわかって、私たちはそれを使わせてもらっている。そういう仲間内で交わされる感謝の気持ちも表れているからなんです。

**D**、ただ単に「不確定性関係」「電磁方程式」と呼ぶだけでも、それが何を指しているのかみんなわかっている。けれど、それでもなお、「ハイゼンベルクの不確定性関係」あるいは「マックスウェルの電磁方程式」なんて長ったらしく呼ぶのは、そこに敬意という、いわば仲間内からのご褒美的意味合いを兼ねているからなんです。

こうして考えてみればわかるとおり、科学者のやっていることは、科学者の仲間内だけに閉じ込められている。知識の生産から、蓄積、流通、消費・活用、評価、褒賞にいたるまで、そのすべてが外には漏れ出していないんですね。

ところで、この事実を当時の確に表現していた文学者がいる。それが夏目漱石<sup>なつめ そうせき</sup>です。漱石の『三四郎』<sup>④</sup>という作品の中に、野々宮宗八という物理学者が出てきますが、これは漱石の門人で東大の物理学教授でもあった寺田寅彦<sup>てらだ とらひこ</sup>をモデルにして書かれたといわれている。その野々宮について、主人公はおおよそこんなふうの評しているんです。

「夏も冬も、昼も夜も、穴蔵のような研究室で光の圧力を調べる研究をしている。だからなかなか野々宮君というのは偉い。でも、所詮は野々宮君がやっていることは現実世界とはまったく無関係である。彼は現実世界とは一生接触することはないのではないか」(引用者意識)

(村上陽一郎「科学の二つの顔」より)

(注1) 「ニュートン」……イギリスの物理学者・天文学者・数学者。

(注2) 「原子」……物質の基本的な構成要素。

(注3) 「有機化学」……化学の一分野。

(注4) 「ジャーナル」……定期的に刊行される雑誌や週刊誌などのこと。

(注5) 「量子力学」……物理学の一部門。

(注6) 「電磁気学」……物理学の一部門。

(注7) 「門人」……弟子のこと。

問 一、——線①「科学者たちはいったい何のために研究をするんでしょう？」とありますが、初期の「科学者たち」に関する説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、「好奇心」を満たしながら、研究成果も認めてもらうために研究を行った。

イ、研究資金や場所の確保に苦心したが、謎の解明のための研究を行った。

ウ、金銭や社会的地位を得るために、「面白い」事柄のみを対象に研究を行った。

エ、他者からの見返りや評価を期待せず、興味や関心を持った事柄の研究を行った。

問二、A、Dにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、たとえば　イ、つまり　ウ、ところが　エ、むしろ　オ、もちろん　カ、まず

問三、Iにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、客観性　イ、主体性　ウ、必然性　エ、偶然性

問四、IIにあてはまる言葉を文章中から四字で探し、抜き出して答えなさい。

問五、——線②「こうした現象」を端的に指し示している部分はどこですか。「〜ということ。」に続くように、——線②より前の文章から二十五字以上三十字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

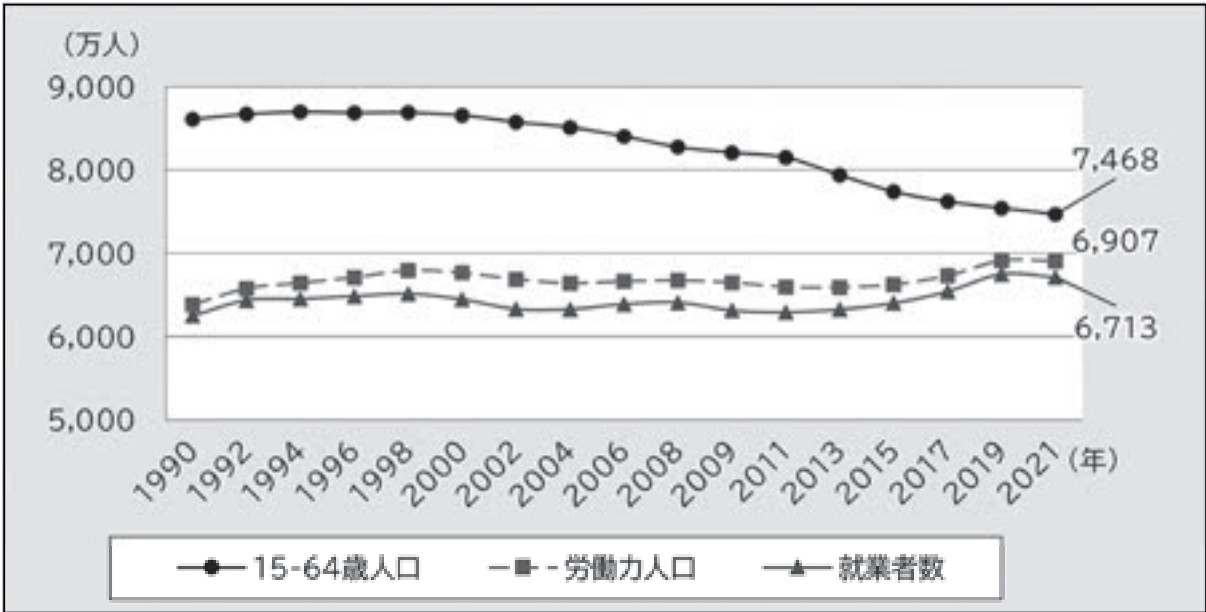
問六、——線③「エポニム」に表れているものは何ですか。文章中から十三字で探し、抜き出して答えなさい。

問七、——線④『三四郎』の引用をとおして、筆者はどのようなことを伝えようとしていますか。文章中の言葉を使って、三十字以上三十五字以内で答えなさい。

四

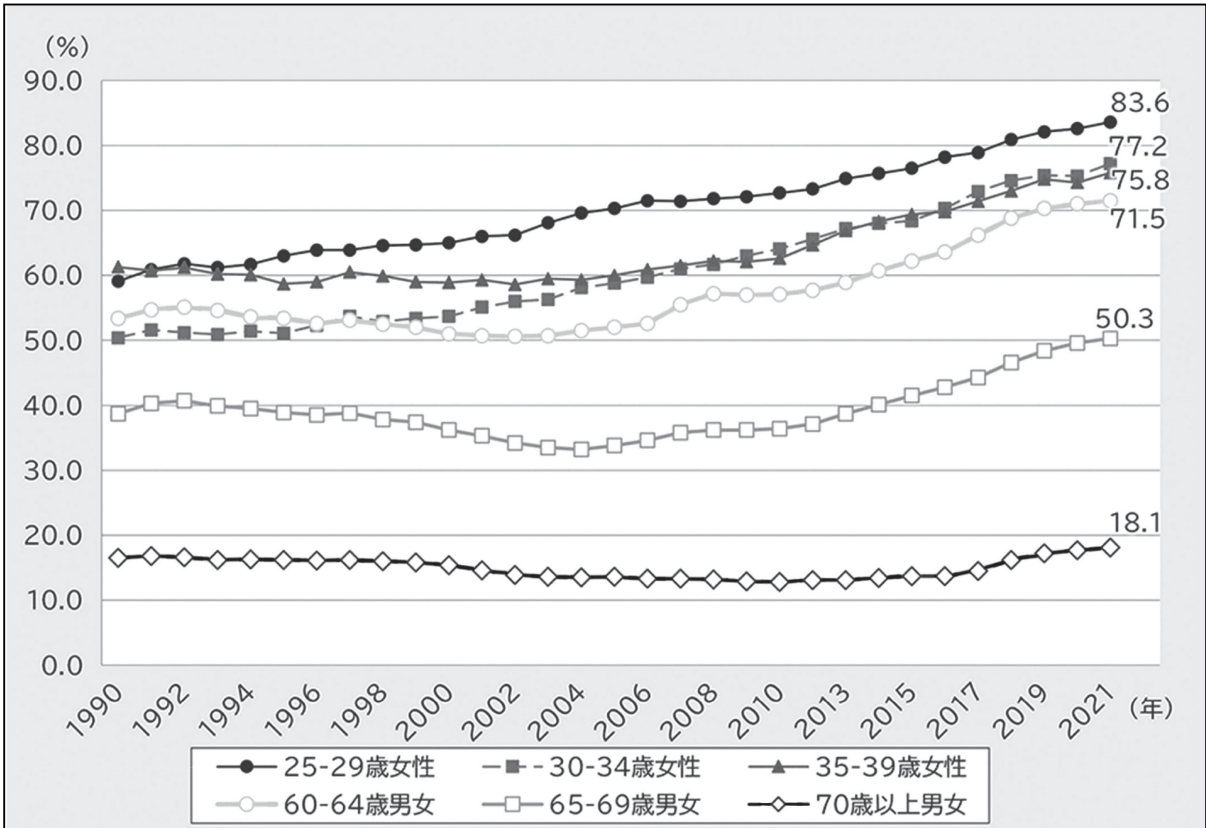
次の資料を見て、あとの問いに答えなさい。

資料A 労働力人口・就業者数の推移



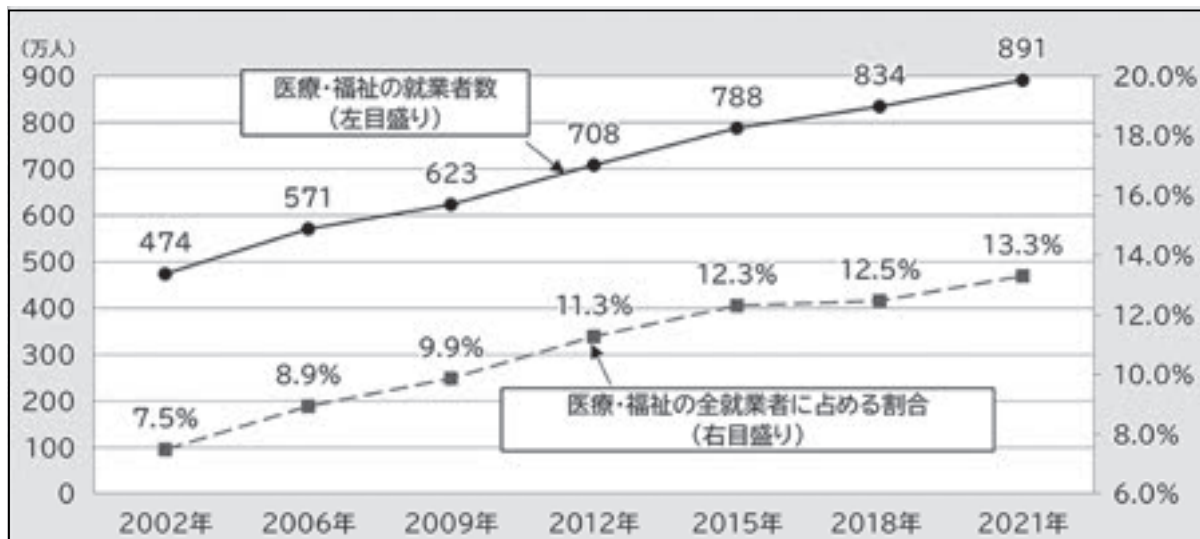
(出典：「令和4年版 厚生労働白書」より)

資料B 就業率の推移



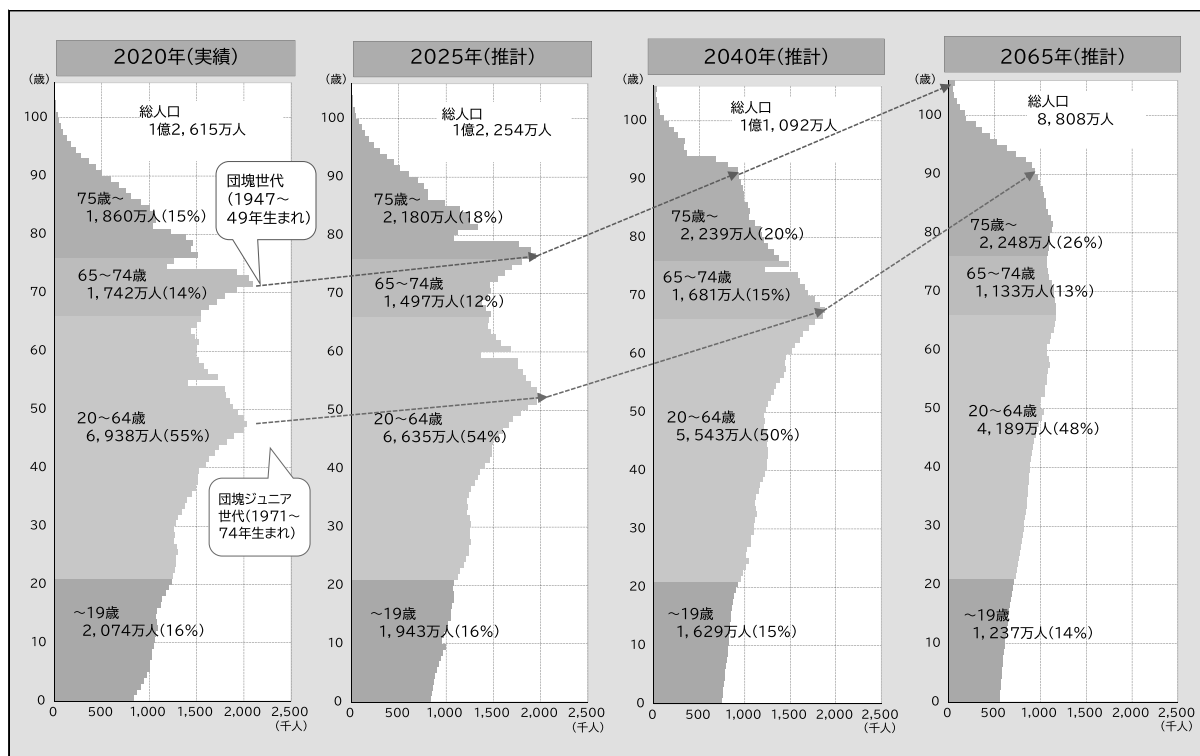
(出典：「令和4年版 厚生労働白書」より)

資料C 医療・福祉の就業者数の推移



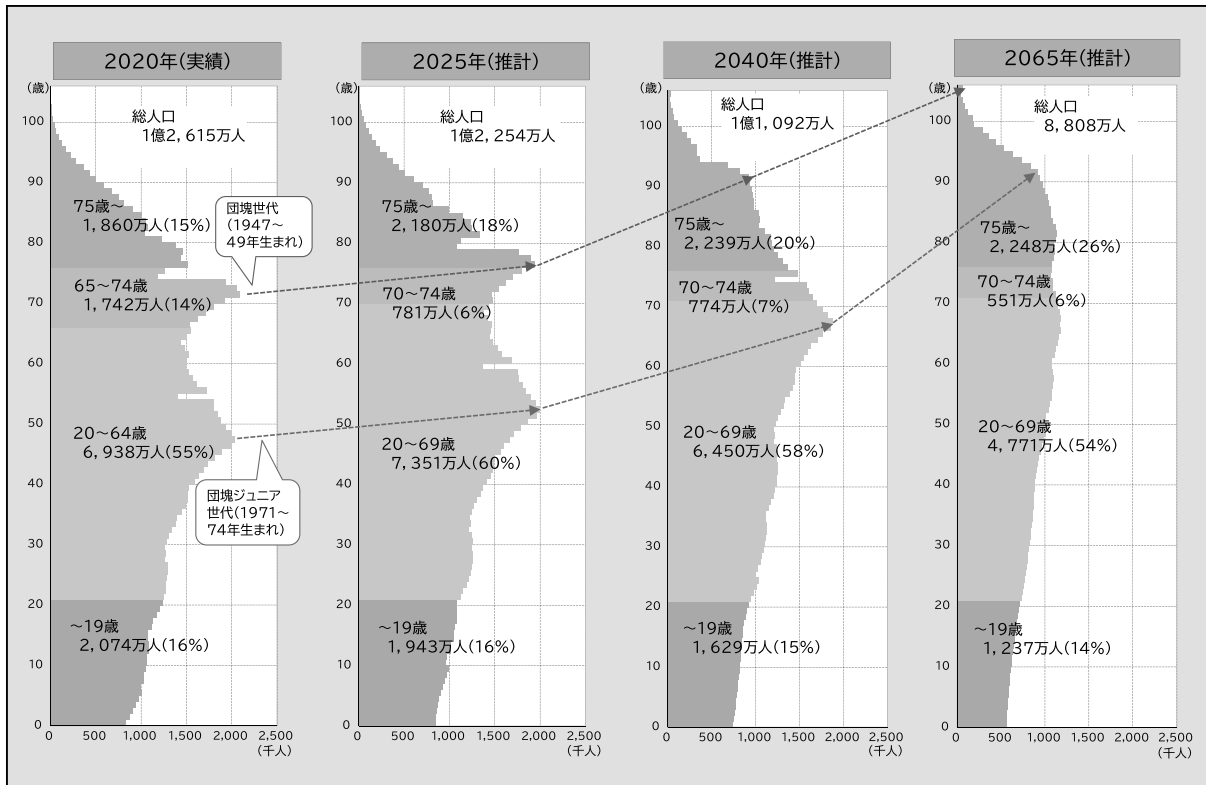
(出典：「令和4年版 厚生労働白書」より)

資料D 人口ピラミッドの変化 (20~64歳区分を含む)



(出典：「令和4年版 厚生労働白書」より)

資料E 人口ピラミッドの変化（20～69歳区分を含む）



（出典：「令和4年版 厚生労働白書」より）

資料F 医療・福祉分野の就業者数の見通し

	2018年	2025年	2040年	
	【実績】	【実績・人口構造を踏まえた必要人員】	【実績・人口構造を踏まえた必要人員】	【経済成長と労働参加が進むケース】
医療福祉分野の就業者数（かつこ内は総就業者数に占める割合）	826万人 (12%)	940万人 (14～15%)	1,070万人 (18～20%)	974万人 (16%)

（出典：「令和4年版 厚生労働白書」より）



資料G

「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(女性活躍推進法)

2019(令和元)年 改正法公布

2022(令和4)年 全面施行

目的：法は、近年、自らの意思によって職業生活を営み、又は営もうとする女性はその個性と能力を十分に発揮して職業生活において活躍することが一層重要となっていることに鑑み、男女共同参画社会基本法の基本理念ののっとり、女性の職業生活における活躍の推進について、その基本原則を定め、関係者の責務を明らかにするとともに、基本方針及び事業主の行動計画の策定、支援措置等について定めることにより、女性の職業生活における活躍を迅速かつ重点的に推進し、もって男女の人権が尊重され、かつ、急速な少子高齢化の進展、国民の需要の多様化その他の社会経済情勢の変化に対応できる豊かで活力ある社会を実現することを目的とするものとしたこと。

「改正高年齢者雇用安定法」

2021(令和3)年 施行

概要：少子高齢化が急速に進行し人口が減少する中で、経済社会の活力を維持するため、働く意欲がある誰もが年齢にかかわらずその能力を十分に発揮できるよう、高年齢者が活躍できる環境整備を図る。個々の労働者の多様なニーズを踏まえ、70歳までの就業機会の確保について、事業主としていずれかの措置を制度化する努力義務を設ける。

- ① 70歳までの定年引き上げ ② 70歳までの継続雇用制度の導入 ③ 定年制の廃止
- ④ 70歳まで継続的に業務委託契約を締結する制度の導入
- ⑤ 70歳まで継続的に事業主が関わる社会貢献事業に従事できる制度の導入

(出典：厚生労働省ホームページより作成)

資料H 労働力需給推計の活用による政策シミュレーション

産業	年	実績			推計			
		2000年	2010年	2017年	2025年		2040年	
					経済成長と労働参加が進まないケース	経済成長と労働参加が進むケース	経済成長と労働参加が進まないケース	経済成長と労働参加が進むケース
産業別就業者数(万人)	農林水産業	326	252	218	180	201	102	135
	鉱業・建設業	658	501	493	439	452	272	288
	製造業	1,299	1,048	1,009	938	1,025	803	1,011
	食料品・飲料・たばこ	160	150	143	135	136	131	133
	一般・精密機械器具	148	139	134	139	146	124	149
	電気機械器具	221	162	136	131	150	117	162
	輸送用機械器具	107	100	121	103	133	89	137
	その他の製造業	663	497	475	430	460	342	431
	電気・ガス・水道・熱供給	34	34	29	26	26	25	26
	情報通信業	157	220	207	123	232	56	224
	運輸業	334	327	324	312	312	307	313
	卸売・小売業	1,174	1,104	1,117	1,047	1,084	830	942
	金融保険・不動産業	250	246	256	246	246	234	237
	飲食店・宿泊業	363	339	333	315	321	293	307
	医療・福祉	451	653	807	863	908	910	974
	教育・学習支援	268	288	311	317	343	296	329
	生活関連サービス	169	160	154	139	139	123	126
	その他の事業サービス	220	309	411	363	417	318	406
	その他のサービス	416	448	471	443	455	420	437
	公務・複合サービス・分類不能の産業	327	326	391	334	333	257	271
産業計	6,446	6,298	6,530	6,082	6,490	5,245	6,024	
2017年との差	農林水産業				-38	-17	-116	-83
	鉱業・建設業				-54	-41	-221	-205
	製造業				-71	16	-206	2
	食料品・飲料・たばこ				-8	-7	-12	-10
	一般・精密機械器具				5	12	-10	15
	電気機械器具				-5	14	-19	26
	輸送用機械器具				-18	12	-32	16
	その他の製造業				-45	-15	-133	-44
	電気・ガス・水道・熱供給				-3	-3	-4	-3
	情報通信業				-84	25	-151	17
	運輸業				-12	-12	-17	-11
	卸売・小売業				-70	-33	-287	-175
	金融保険・不動産業				-10	-13	-22	-19
	飲食店・宿泊業				-18	-12	-40	-26
	医療・福祉				56	101	103	167
	教育・学習支援				6	32	-15	18
	生活関連サービス				-15	-15	-31	-28
	その他の事業サービス				-48	6	-93	-5
	その他のサービス				-28	-16	-51	-34
	公務・複合サービス・分類不能の産業				-57	-58	-134	-120
産業計				-448	-40	-1,285	-506	

(出典：「雇用政策研究会報告書2019」より)

問 一、資料A～Hから読み取れることとして適当でないものを次から三つ選び、記号で答えなさい。

ア、総人口は、二〇〇八年をピークに減少に転じたが、二〇二一年の労働力人口は、一九九八年とほぼ同じ水準を維持している。

イ、二〇二一年以前と比べて、女性や六〇歳以上の人の就業率が上昇するとともに、女性の活躍推進や高齢者の就労促進等に関する各種施策の推進が、労働力人口や就業者数の底上げに寄与していると考えられる。

ウ、医療・福祉分野の就業者数は、二〇二一年現在で八九一万人となっている。二〇〇二年以降についてみると、就業者数は右肩上がり増加し、二〇二一年は二〇〇二年の約一・九倍となっている。

エ、全就業者に占める医療・福祉の就業者の割合は、二〇〇二年では七・五%だったものが、二〇二一年には十三・三%にまで増えている。オ、二〇四〇年には、二〇～六四歳人口が五五四三万人となり、人口全体の三分の二を占めるまでに減少すると推計されている。

二〇二〇年と比較すると、二〇四〇年の二〇～六四歳人口は約一四〇〇万人減少すると見込まれている。

カ、経済成長と労働参加が進むと仮定するケースでは、就業者数は二〇四〇年に六〇二四万人となると推計されている。二〇二一年の六七一三万人から減少するものの、二〇四〇年は大幅な人口減少下にあることに鑑みれば、その減少は相当程度抑えられているといえる。

キ、経済成長と労働参加が進むと仮定するケースでは、医療・福祉分野の就業者数は二〇四〇年に九七四万人と推計されている。

二〇四〇年の医療・福祉分野の就業者数は一〇七〇万人が必要となると推計されており、九六万人の差が生じているが、女性の活躍推進や高齢者の就労促進等に関する各種施策の推進によって解決できる可能性が高い。

問 二、資料A～Hの内容をまとめた次の文章の空欄にあてはまる言葉を、資料A～Hの中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

今後、現役世代の人口が急減する中で、活力ある経済の維持を考えると

1、二字

2、四字

等をはじめとした一層の労働

参加が不可欠であるといえる。また、社会保障の担い手である医療・福祉分野の

3、四字

は急速に増加しているものの、引き続き

二〇四〇年に向けて、更に担い手が必要となることが見込まれている。

